

(中間C)

評価分科会総合評価

研究課題名：沖合・沿岸津波観測等による津波の高精度予測に関する研究

評価分科会（地震火山分野）

分科会長：古川信雄

委員：小泉尚嗣、田中正之、泊 次郎、渡辺秀文

評価年月日：平成24年2月9日

1. 総合評価

- (1) 継続の可否 ☒ 継続 ☐ 中止
(2) 修正の必要の有無 ☐ 修正の必要あり ☒ 修正の必要なし

2. 総合所見

本研究課題は、地震津波の発生・伝搬メカニズムの理解を深め、気象庁による津波警報・注意報の発表・解除の高度化に資することを目指したもので、国民の期待の特に高い重要課題である。東北地方太平洋沖地震に伴う巨大津波によって引き起こされた甚大な津波被害に鑑みても、社会的に緊急性が高く、早期の実用化が望まれており、引き続き研究を進めるべきである。

研究は順調に進捗しており、2004年スマトラ沖地震大津波の発生メカニズムとしての分岐断層の特定や、沖合津波観測データを用いた経験的な津波予測手法の開発とインバージョンによる津波予測手法の開発はいずれも大きな成果であり、十分な成果が出ていると評価できる。特に、インバージョンによる津波予測は、今後の海域における津波観測網の整備とあわせると、防災上大きな貢献が期待できる。また、得られた成果の気象庁業務への活用へ向けた検討を進めていることも評価できる。

東北地方太平洋沖地震の津波被害が大きかったことから、気象庁の津波警報に対して過剰な批判や理不尽な要求が寄せられている。発表した津波情報についてきちんと科学的評価を行い、その結果を何らかの形で公表することも重要である。

沖合津波観測データ等を用いた津波予測手法は、迅速で正確な津波警報発表のために不可欠であるが、更新された警報が津波襲来域に届かない可能性が高いことを考慮し、より大きな津波の予測への更新にならないように十分注意をする必要があるだろう。また、津波計のデータから波源域を推定して津波高を計算する手法については、検証が十分ではないように思われるので、海外を含めてデータのある他の地震についても検証するとともに、地震波による震源解析の結果に基づいた津波シミュレーションとの優劣も比較検討して欲しい。